

平成31年1月16日(水)

李賀という詩人

李賀(りが、791年 - 817年。貞元7年 - 元和12年)は、中国中唐期の詩人。字は長吉。官職名から李奉礼、出身地から李昌谷とも呼ばれる。福昌県昌谷(現在の河南省洛陽市宜陽県三郷鎮)の人。その詩は伝統にとらわれずはなはだ幻想的で、鬼才と評された。

「贈陳商」李賀 (陳商に送る)

長安有男児 二十心已朽 (長安に男児有り 二十にして心已に朽ちたり)
楞伽堆案前 楚辭繫肘後 (楞伽案前に堆く 楚辭をば肘後に繫く)
人生有窮訕 日暮聊飲酒 (人生窮訕有り 日暮聊か酒を飲む)
祇今道已塞 何必須白首 (祇今道已に塞がる 何ぞ必ずしも白首を須たむ)

現代語訳

長安に一人の男児がいる
二十歳にしてすでに心は朽ちてしまった
楞伽経は机に堆く積まれ
楚辭は肌身離さず持っているほどの者だ
しかし人生には困難がつきまとうもので
現在は日が暮れると少々酒を飲み憂さを晴らすような生活だ
今まさに将来の道が塞がってしまった
どうして白髪に老いるのを待つ必要があるだろうか

李賀は文学的に早熟で、14歳にして数々の楽府を著して名声を得ていた。また17歳ころ、自作の詩を携えて当時文壇の指導者的存在であった韓愈を訪ね、激賞とその庇護を受けた。

810年、進士を目指して長安に上京し科挙に応じるが、思いもよらず受験を拒まれる。父の諱の一字である「晋(シン)」と進士の「進(シン)」が同音であることから、諱を避けて進士になるべきではない、というのがその理由であった。

もちろんこじつけにすぎず、直ちに韓愈が『諱の弁』を表して反論を行うが通らなかった。当時、およそ知識人階級は進士となって科挙を通り、官僚政治家となることを唯一の目的とした。その道を閉ざされた李賀は、失意のうちにひとたび長安を離れて昌谷に戻るが、翌年、奉礼郎の官職を得て再び上京する。

しかし、科挙を経ずして与えられたこの官職の品階は従九品上、祭礼の際に席次を管轄する端職にすぎず、自負心の強い李賀には到底耐えられるはずもな

く、813年春、「奉礼 官卑しく復た何の益有らん」の詩句を残し、職を辞して帰郷するに至る。

ちなみにこの奉礼郎という官職も皇室の血縁者に当てるのが通例であった。

その翌年、別に職を求め、友人の張徹を頼って潞州（山西省長治市）に赴くも意叶わず、昌谷に戻った翌年の817年、にわか発した病により、母に看取られながら短い生涯を閉じた。享年27。

なぜ、李賀は楚辞を肌身離さず持っていたのか。それはきっと屈原の作であるからであろう。

屈原（くつげん、紀元前343年1月21日頃 - 紀元前278年5月5日頃）は、中国戦国時代の楚の政治家、詩人。秦の張儀の謀略を見抜き、踊らされようとする懐王を必死で諫めたが受け入れられず、楚の将来に絶望して入水自殺した。春秋戦国時代を代表する詩人としても有名である。

後に、屈原の無念を鎮めるため、また亡骸を魚が食らわないよう魚のえさとしても、人々が笹の葉に米の飯を入れて川に投げ込むようになったと言われ、これがちまきの由来といわれる。その命日とされる5月5日に粽（ちまき）を食べる由来でもある。

学生時代、第一志望がかなわず、一人都の夕暮れに雑踏の中を放浪し、自宅のアパートに戻るとこんな李賀の詩を読んで自分を慰めたこともあった。李賀よりは長生きをするだろうか、太宰よりは長生きをするだろうか、芥川よりは長生きをするだろうか、高橋和巳よりは長生きをするだろうか、寺山修司よりは長生きするだろうかというまにまに、齢を重ねてしまった。

二十歳にしてすでに心朽ちるとも、歴をめぐらせ、六十歳になれば歳の初めとなる。心朽ちることなし。白髪においてこそ、新しき命なり。